

港区立郷土歴史館

歴史館だより

企画展「未来に伝えよう!みなと遺産 新指定文化財展(令和6年度)」より
麻布本村町会の木造獅子頭野口 朋子
(学芸員)

獅子頭といえば、お正月の獅子舞やお祭りの行列を思い浮かべる方もいるかもしれません。獅子頭に頭をかんでもらうと無病息災になる、といわれています。その起源は6世紀なかば、伎楽とともに大陸から渡来したとされ、古来より芸能や祭礼の場で用いられてきました。



麻布本村町会の神酒所飾り

9月中旬の麻布氷川神社例大祭の時に麻布本村町会会館を訪ねると、山車人形を中心とした神酒所飾りをみることができます。江戸時代、麻布氷川神社の祭礼では山車を仕立てた巡行行列が数年~数十年の中絶期間を経て断続的に行われました。ここに飾られた道具類は、氏子町の麻布上ノ町と麻布新町が祭礼で用いたものです。

神酒所飾りの中に一際目を引く獅子頭があります。大きさは一般的な獅子頭の2倍以上はありそうです。頭に角を載せた雄と宝珠を載せた雌の一对からなり、金箔を貼り漆を塗り重ねる白檀塗で仕上げられています。耳は垂れ耳とし、金色の目を見開き額や鼻に皺をよせ、上唇をうねらせて大きな歯をみせます。顎は開閉式で、口中には舌も作られています。眉頭や眉尻、耳下の毛束は渦状に高く彫りあらわされます。背面に添えた、白毛を植えた尾の高さは180cmもあり、全体的に力強く迫力のある造形です。



獅子頭陰刻銘(部分)

頭頂部には陰刻銘があります。文久2(1862)年、麻布氷川神社の別当徳乗院の住持栄運の名に続いて、川越屋吉右衛

門・坂田屋嘉吉・伊予屋栄助・三河屋喜三郎はじめ麻布新町の世話人18名(雄雌で9名ずつ)の名が列記され、最後に「彫工 後藤三四良 橋恒俊」と刻まれます。この後藤三四郎は、関東の神社の彫物を担った関東彫工の一派である後藤家の5代正綱の門人で、明治11(1878)年に48歳で死去した人物に相当すると考えられます。

大正8(1919)年、麻布新町の祭礼集合写真には、人形山車「素戔嗚尊」を背景に手古舞姿の女性たちとともに獅子頭の姿が見えます(尾が目印です)。



麻布新町の祭礼集合写真(部分)



麻布氷川神社祭礼図

また昭和10(1935)年の祭礼図には、獅子頭がお囃子とともに山車に載り巡行する姿が描かれます。近代以降、人形山車中心の祭礼から神輿中心の祭礼へと移行するなかで、獅子頭山車が祭礼行列の先頭をゆく様子を知ることができます。



同上(部分)

麻布本村町会の祭礼関連資料は、麻布地域の信仰や民俗を知ることのできる文化財として、令和6(2024)年度の港区指定文化財に指定されました。なかでもこの獅子頭は、製作年、製作者、世話人等の関与者が明確で、近世から近現代にいたる祭礼の変遷とともに用いられてきた様相をしめす、貴重な作例といえます。新指定文化財展(令和7年1月11日~3月9日)において展示しますので、ぜひその迫力をご覧ください。

※掲載した資料はすべて麻布本村町会所蔵です。
参考文献:伊東龍一「関東の彫物大工の系譜と幕府彫物大工棟梁高松家」『日本建築学会計画系論文報告集』第420号、1991年



港区立郷土歴史館

歴史館だより

旧赤羽小学校発掘調査の成果速報

発見された朝妻焼

月岡 千栄

(学芸員)

港区立赤羽小学校は、令和5(2023)年4月に現在の新校舎に移りましたが、旧赤羽小学校の敷地では、校庭や幼稚園舎の工事に伴って埋蔵文化財の発掘調査が行われました。赤羽小学校のあった場所とその周辺は、およそ360年前の江戸時代、寛文元(1661)年から約210年間は筑後久留米藩有馬家※の上屋敷でした。明治時代に入ってまもなく、屋敷は工部省赤羽工作分局という政府が運営する機械工場となり、さらにその後は、海軍砲兵工廠という軍の施設として活用されました。そして、大正15(1926)年、今から100年ほど前に現在の赤羽小学校の前身となる東京市赤羽尋常小学校が開校しました。発掘調査では有馬家屋敷に関する池跡、地下室など、そして明治時代以降の海軍施設に関する可能性のある煉瓦建造物跡などが発見されました。

今回は調査で発見された筑後久留米藩のやきもの、朝妻焼をご紹介します。朝妻焼とは、久留米藩6代藩主有馬則維によって正徳4(1714)年頃から十数年間だけ操業した窯で焼かれたやきもので、日用食器とともに陶器の給水器など特徴的なものも作られていました。調査でも朝妻焼の磁器の碗や陶器の給水器



朝妻焼 磁器の皿 高台内に「朝」と銘が入る

などが発見されました。給水器は小鳥の水飲みで使用されたようで、大人の手のひらサイズの大きさの容器に、水が入りする小さな穴が開いており、その先に細長い水の受け部がついて、水はこぼれることなく受け部に溜まります。理科の実験に出てきそうな大気圧の仕組みを利用して、水の

出入り口を小さな穴1ヶ所だけにするとう表面張力で水が支えられてこぼれないようです。穴が2つあったり、穴が大きくなると、表面張力では支えきれずに水がこぼれ出てしまうと考えられます。港区では、給水器を



朝妻焼 陶器の給水器

含む朝妻焼の出土例はあるものの、今回の調査では形がよく残っているものも多く、給水器の特徴的な形をよく観察することができます。

絵図や書物などで久留米藩の屋敷だと推定していた土地から、このように久留米藩独自のやきものが発見されたことは、発掘調査の成果としてとても重要であり、嬉しい驚きでした。現在作成中の発掘調査報告書では今回注目した朝妻焼以外にもさまざまな結果をご報告しますので、ご期待ください。



水を入れた様子。受け部は割れているが水が垂れてくることはない。

※現在の福岡県久留米市を領地としていた大名家

参考文献

『第38回くめめの考古資料展 江戸時代のくめめ』

(2013年 久留米市市民文化部文化財保護課)

『筑後久留米藩有馬家屋敷跡遺跡発掘調査報告書』

(2022年 株式会社パスコ)